やまゆり園事件は問う中井やまゆり園の模索

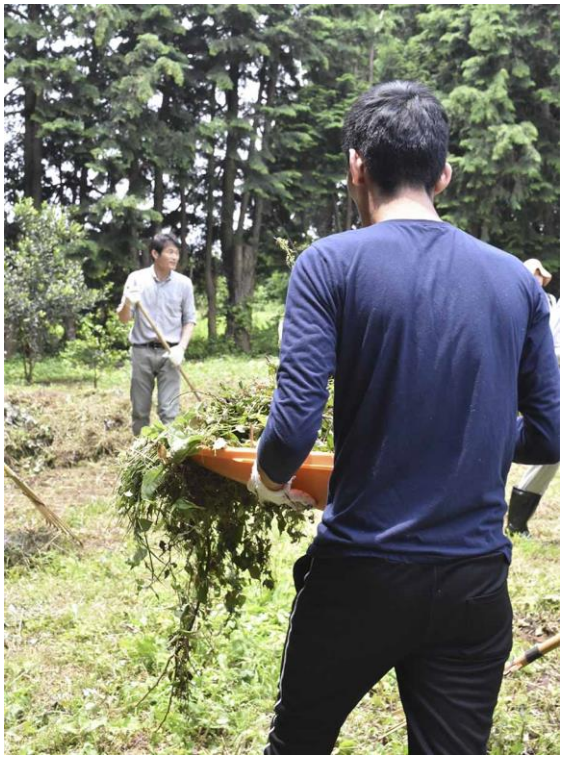
（成田　洋樹）

（1） 暗闇で過ごした8年

　6月中旬の昼下がり、県立知的障害者施設「中井やまゆり園」（中井町）の生活寮にも夏の陽光が差し込んでいた。

　自傷他害などの「強度行動障害」がある人らが暮らす生活寮の「リビング」では、20代男性が座椅子に座ってたたずんでいた。職員室から出てきた男性職員がしゃがんで視線を合わせ、声をかける。「コーヒーを飲みに行きませんか」

少しずつ取り戻す日常



　職員の誘いに、男性は「行く」と応じた。2人が向かった先は園内の「コーヒーサロン」。入所者の余暇の場として月2回ペースで開かれている。

　この日のサロンは女性の入所者、職員が多く、柔らかな雰囲気に包まれていた。男性と職員もその輪に加わり、並んで座った。

　「はい、どうぞ」。女性職員からホットコーヒーを差し出されると、手先が器用な男性はクリームと砂糖の封を丁寧に開けていった。女性職員からカメラを向けられると、ピースサインをしてみせた。その場はどっと笑いに包まれた。

男性はゆっくりと味を確かめるようにコーヒーを飲み干した。左隣の職員が「もう1杯飲みますか」と声をかけると、うなずいた。記者の「おいしいですか」との問いに「おいしい」と答えた。

つかの間の“だんらん”を終え、寮へと戻る廊下で職員がつぶやいた。「きょうは本当に暑いね」。それを聞いた男性の歩くスピードは増し、冷房が効いた寮のリビングへと急いだ。

男性が入所したのは2014年春、10代だった。以来、22年夏までの8年余り、1日のほとんどの時間を、室内から鍵を開けることができない部屋での暮らしを余儀なくされた。

興味や関心から気になった物を破壊する行動とそれに伴うけがを防ぐためには、刺激の少ない部屋で過ごす必要があると判断され、長時間居室施錠という形で身体拘束されていた。

殺風景な部屋は日中も扉の隙間から木漏れ日が差す程度で、ほぼ真っ暗だ。自らの手で照明などの備品を軒並み壊してしまったためという。

22年度から居室施錠廃止に向けた取り組みが本格化した結果、今では日中は光が差すリビングで主に過ごしている。軽作業を行う時間も少しずつ増えてきた。

日中に暗闇で過ごした8年余り。閉ざされた部屋で何を思いながら過ごしていたのか。そして、これからどんな人生を歩んでいきたいのか。職員たちはまだ、その胸の内を聞き取ることはできていない。

（園外の農地で入所者や職員らと作業に励む男性。8年ほど施錠された暗い部屋での生活を余儀なくされた＝6月下旬、中井町）

1日20時間近く施錠

県立中井やまゆり園に、昼食の時間が訪れた。自傷他害などの「強度行動障害」がある人らが暮らす生活寮の「リビング」では、テーブル2脚が用意された。20代男性ともう一人の入所者が、職員の介助を受けながら食事を取り始める時間だった。

職員が、おかずやご飯を少しずつ男性のおわんによそる。職員から「次はどれを食べる？」と語りかけられると、男性は「ハンバーグ」と答えた。6月下旬のことだ。

入所施設の日常風景だが、男性にとってはずっと日常ではなかった。1年ほど前まで、1日のうち20時間近く施錠された部屋での生活を余儀なくされたからだ。リビングで食事をすることも、他の入所者と昼食を共にすることも以前はなかった。

長時間施錠が行われていたときは食事時は解錠されたものの、室外には出ずに玄関付近にテーブルを持ち込んで職員の介助を受けながら食事を取った。その際、男性の視界はパーティションでさえぎられた。破壊行動防止のための刺激遮断策だった。

食事後、別の職員が男性の部屋の清掃を行うために室内に入った。本人は室内でその様子を見守った。

6畳ほどの室内はほぼ真っ暗で、庭へとつながる外扉の隙間からわずかな木漏れ日しか入ってこない。むき出しのコンクリートで覆われた部屋には寝具を除いて生活用品はほぼなく、生活感は感じられない。

男性は児童施設在籍時から、気になった物を破壊することがあった。園は9年ほど前に男性を受け入れる際、リビングなどの共用スペースを通らずに外に出られるように、外扉付きの部屋を特別に用意した。共用スペースの備品が破壊された場合、ほかの入所者の生活に影響を及ぼしかねないと判断したからだった。

入所直後、自室の照明器具などの備品は軒並み破壊してしまったという。以来、日中の暗闇での生活は8年余りも続いた。室内のトイレも同様に破壊したため、ポータブルトイレで代替された。

（職員の介助を受けながら、園の生活寮の「リビング」で昼食を取る男性（右）＝6月下旬）

)転機は外部からの指摘

外部からの指摘が転機になった。

県の有識者組織「障害者支援施設における利用者目線の支援推進検討部会」は2021年3月、中井園での長時間居室施錠の改善を求めた。

男性のケースでの施錠廃止に向けた取り組みが始まったのは翌22年4月以降。まずは刺激に慣れてもらうために食事時に使うパーティションの高さを低くし、夏までに全廃した。同8月下旬から日中は居室の鍵を開け、リビングで過ごす取り組みを始めた。食事もリビングで取る形にした。

翌23年3月下旬以降は室内から鍵を開けることができる方式に変えたため、以降は施錠時間はゼロになった。6月下旬の会議で施錠の廃止が正式に決まった。

施錠廃止の取り組み中も破壊行動はあったものの、目立ったトラブルは起きていないという。ではなぜ、解錠に向けた取り組みが進まず、長時間の居室施錠は長期に及んだのか。

「自転車走行や散歩といった活動を用意するなどして施錠時間を1日20時間弱まで減らしてきたが、破壊行動への不安や限られた人員からさらなる削減に踏み出す見極めがなかなかできなかった」。激しい破壊行動に直面したことがある職員はそう説明し、複雑な思いを口にした。「廃止に向けた取り組みを進めても特に問題は生じなかったため、結果的には取り越し苦労だった。本人には申し訳ない気持ちでいる」

（2） 支援実態にメス

県立中井やまゆり園（中井町）が改革を迫られるようになったのはなぜか。それはこの3年余り、県立障害者施設の支援実態について外部のメスが入り続けてきたから

だ。

発端となった「津久井やまゆり園利用者支援検証委員会」では2020年1月から身体拘束事案の検証が進められた。後継組織として同年7月に設置された「障害者支援施設における利用者目線の支援推進検討部会」では県立全6施設に検証対象が拡大した。

同園では21年2月時点で1日8時間以上の長時間居室施錠は22件あった。同部会は翌3月にまとめた報告書で、同園での長時間居室施錠について厳しく指摘した。

調査で浮かび上がる実態

〈身体拘束に頼らない支援方法の開発が不十分である。また、職員の勤務体制上や他利用者との兼ね合いによって居室を施錠しているが、環境改善に向けた検討が十分にされていない〉

〈身体拘束は本人の尊厳を侵害する行為であり、重大な人権侵害であることを認識する必要がある〉

職員への聞き取り調査から浮かび上がった支援実態についても記されていた。

〈利用者の人生の質を向上させていくような前向きな発言、あるいは身体拘束をすることの悪影響について語られることがほとんどなかった〉

（中井やまゆり園支援改革プロジェクトチームの一員として黒岩知事に改革案を提出する佐藤さん（右から2人目）＝5月12日、県庁）

身体拘束の3要件とは

国学院大教授（権利擁護）で弁護士の佐藤彰一さん（69）はこの間、県立施設の検証に関わり続けている。津久井園検証委で委員長を務めた後、同部会委員として中井園の現状確認も重ねた。同園の虐待事案に関する外部調査委員会の委員長にも就き、同園支援改革プロジェクトチームの一員でもある。

佐藤さんは長時間居室施錠について目を光らせてきた。やむを得ず身体拘束を行うには（1）切迫性（本人や他の入所者らの生命や身体が危険にさらされる可能性が著しく高い）（2）非代替性（代替方法がない）（3）一時性（一時的である）－の3要件を全て満たす必要があるが、「中井園での20時間もの長時間居室施錠は一時性という要件を満たしていないのは明白。他の方法での支援を怠った職員の職務放棄と言わざるを得ず、そうした状況を放置した管理職の責任は一層重い」と批判する。

長時間居室施錠は、「人間性を失わせる行為」と断じる。「部屋に閉じ込められて自由を奪われた本人は『何を言っても無駄だ』という感覚になり、『生きている意味はあるか』と自己否定に陥る。身体と精神に深刻な影響をもたらすという認識を職員はどこまで持っているか」

16年7月に起きた津久井やまゆり園事件の加害者は、意思疎通が難しいと決めつけた重度障害者を人間として見なかった。「長時間居室施錠に及んだのは、職員が入所者を同じ人間として見ていないから。やまゆり園事件の加害者の見方と何ら変わらない」

検証と反省、不可欠

身体拘束の件数は県立6施設の中で中井園が突出して多かった。20年12月時点では6施設で計98件あったが、同園は61件に上った。そのうち居室施錠が5割超の34件を占めた。

改善の取り組みが進められた結果、23年3月には同園での拘束は9件にまで減った。そのうち居室施錠は5件で、いずれも1日8時間未満だった。

佐藤さんは警鐘を鳴らす。「長時間居室施錠がなくなっていくこと自体はいいが、『入所者を人間と見ない対応はなぜ続いたのか』の検証と反省は不可欠だ。それらがなければまた起きかねない」

入所者を人間として見られない状況に園を追い込んできたのは誰か。それは障害のある人を施設に追いやる地域であると指摘する。「施設と地域の問題は密接に関わっている。施設から地域生活への移行の壁になっているのも、地域が当事者にとって暮らしにくい場であり続けているから」

そして入所施設の構造的な問題に目を向ける必要があると説く。「集団生活が苦手な人に施設生活を強いるのは本来無理な話であり、県は地域生活支援を手厚くすることとセットで県立障害者施設の存廃を含めた議論をするべき時が来ている」

（対応が後手に回り、虐待を防げなかった県立中井やまゆり園＝中井町　）

（3）　対応後手虐待防げず

〈人権意識の大きな欠如が生じている〉

〈利用者が人間らしい生活を送れなくなっており、職員も利用者を人間として見られ

なくなっている〉

県立中井やまゆり園（中井町）の支援に関する県の外部調査委員会は2022年9月にまとめた報告書で厳しく指摘し、改善を求めた。後に園の支援改革プロジェクトチームは、この指摘の意味をこう説明した。

〈地域社会から断絶された環境の中で、行動障害への対症療法的な対応によって、利用者の人間性や人柄を読み取ることがおろそかになっていた〉

外部調査委は報告書で、虐待の疑いがある25件について関係自治体に通報したと公表した。翌23年5月の報告書ではそのうち9件が虐待認定されたとした。

これとは別に、県は21年5月、8時間以上に及ぶ長時間居室施錠という形で身体拘束していた事案が同年2月時点で22件あり、そのうち2件が関係自治体から虐待認定されたと明らかにした。

園長を懲戒処分

県は23年5月、園長を減給3カ月の懲戒処分とした。監督責任のほかに処分の主な対象となった事案は、（1）飲料水に異物混入（2）不潔な部屋での生活（3）長時間の居室施錠ーなど計4件。（1）（2）とも自治体から虐待認定された9件に含まれ、居

室施錠も先の事案だった。

（1）については、20年7月中旬、入所者が服薬するための水に塩が混入されていたと職員から報告を受けたにもかかわらず適切な措置を講じず、11月中旬までに入所者5人に計33回の同様の被害を招いたとした。

（2）については、同年12月以降、入所者が居室の天井に大便を投げ付ける行為を繰り返し、職員の清掃が追いつかなくなっても適切な措置を講じず、天井が大便まみれの部屋で食事や就寝をさせたとした。

処分を受けた園長は取材に対し、異物混入事案について「職員間であつれきがある生活寮で発生したことから慎重な対応が必要と判断したが、加害者を特定することができなかった」と釈明した。

不潔な部屋の事案については「清掃が追いつかなかったという理由があったにせよ、私も現場に改善を強く求めなかった。利用者の目線に立てていなかった」、長時間の居室施錠については「身体拘束をする際の判断が甘く、廃止に向けた取り組みの検討が不十分だった」と答えた。

検証は不十分

懲戒処分は園長だけだった。虐待や不適切支援事案の計15件で職員11人の関与を特定し、退職者4人を除く職員7人を口頭訓戒や厳重注意とした。所管の福祉子どもみらい局長ら幹部職員15人は監督責任として文書訓戒や口頭訓戒とした。黒岩祐治知事は監督責任として給料減額案を県議会に提案し可決された。副知事2人は給料の一部を自主返納する。

今回の処分では法令違反などが認められた26件が対象となったが、入所者の肛門にナットが入っていた虐待事案などを含む11件では加害者が特定できなかった。処分によって問題に一定の区切りが付けられ、園では入所者の生活の幅を広げる改革が進む。

こうした流れに対し、疑問を投げかける職員がいる。「改革自体はいいが、個々の虐待が起きた要因について職員レベルで掘り下げて検証する取り組みは進んでいるとは言い難い。このままではまた起きてしまう可能性だってある」

◆県立知的障害者施設「中井やまゆり園」 県立津久井やまゆり園（旧相模湖町、現在は相模原市緑区）が開園した8年後の1972年に中井町に開設した。定員140人（短期入所含む）に89人（男61人、女28人）が入所し、「強度行動障害」がある人が約6割を占める。年齢は21歳から75歳で平均46歳、入所期間は平均19年で最長51年。県職員が勤務する直営施設で、職員は193人。

（4） 入所者の人生顧みず

「民間施設や地域、家庭で対応が困難な人を園で受け入れることでもって役割を全うしていると勘違いしていた。利用者一人一人の人生にまで思いを寄せることができず、深く反省しなくてはならない」

県立中井やまゆり園（中井町）の菅野大史園長（当時）は施設運営自体に誤りがあったとして、壇上で頭を下げた。

外部調査委員会が報告書をまとめてから2カ月後の2022年11月、園と県が改革の進捗（しんちょく）状況について説明するために秦野市内で開いた報告会でのことだ。

自傷他害や物品破壊といった「問題行動」の軽減に支援が集中し本人の生活の幅を広げることはできず、地域から隔絶された園内で生活が完結し地域生活移行も進まない―。園長の釈明からは、そんな園の窮状が浮かび上がった。

いったん入所したら最期まで暮らす「ついのすみか」としての側面が強く、園に入る際に本人に入所の目的を伝え、どのような人生を送りたいかを話し合うことはなかったという。

（県立中井やまゆり園の改善状況について園長らが説明した報告会＝2022年11月下旬、秦野市内）

虐待事案、背景に何が

一連の虐待事案や不適切な支援が生じた背景には何があったのか。

民間の障害者入所施設長や識者、県職員らで構成する支援改革プロジェクトチームが23年5月にまとめた「当事者目線の支援改革プログラム」などによると、さまざま問題が浮かび上がる。

園が袋小路の状態に陥ったのは県の障害者施策が影響していた。「問題行動」が激しい「強度行動障害」がある人に対応する施設として20年ほど前から対象者が集められた結果、次第に対応が追い付かなくなっていったという。

短期間での人事異動も影を落としていた。県職員はおおよそ3、4年で異動するため入所者と関わりを深めるのは容易ではなく、いったん作成した手順書に基づいた対応などに傾きがちになり、支援が硬直化している側面があった。

不十分な関わりは入所者が食べ物をかみ砕いたり、歩いたりする身体機能の低下を見落とすことにもつながり、入所前より重度化するケースもあった。

県職員が勤務する直営の県立知的障害者施設の減少も響いていた。津久井やまゆり園を皮切りに05年度から指定管理者制度の導入が進み、直営はいまでは中井園のみ。経験を積み重ねるのは難しい状況になっているにもかかわらず、人材育成についての方針が県にはなかった。

そうした状況の中での人材のやりくりについて、県職員からは「児童福祉などに手厚い人員配置がなされる一方で、障害者施設は軽視されてきた」という声が上がる。

入所者が暮らす生活寮の中には長年にわたって職員間にあつれきがある寮があり、そこでは支援について話し合う組織文化をつくれなかったという。一連の虐待問題

や不適切な支援が生じたのは、対応が難しい入所者が多い上に、こうした組織風土の寮に集中していた。

地域の側の問題とは

同プログラムの指摘は、関係機関にも及んだ。

本人の生活に関わる自治体や相談支援事業所が園での生活の様子を確認しないなど対応が不十分だったこともあり、身体拘束が漫然と続く状態が続いたとした。

さらに、地域の側の問題についてはこう記した。〈地域も、利用者を「最終的な居場所」として園に入所させ、地域に帰ってくる準備をしていなかった〉

地域から隔絶された施設で完結する生活、県の障害者施策や人事異動の影響で行き届かぬ支援、職場の組織風土、関係機関の対応不足、地域の側の無関心。これらが長年にわたって折り重なり、入所者一人一人の人生を顧みない施設が生み出された。虐待事案もこうした構造の下で起きた。

（5） 暮らしづくりに伴走

「ここで人が暮らしているのか…」。県立中井やまゆり園（中井町）を初めて訪れたとき、障害福祉に長年携わってきた大川貴志さん（45）は絶句するしかなかった。

生活寮やトイレの清掃が行き届いておらず、生活感は全く感じられない。一時滞在すら苦痛で早く立ち去りたくなったという。2021年9月に発足した同園支援改革プロジェクトチームの一員になる数カ月前のことだ。

（昨年5月に入所者と職員らが一緒に草刈りを行った中庭。生活寮の外に出る機会が少なかった入所者も作業に加わり、園が変わる契機になった＝7月中旬、中井やまゆり園 ）

職員、関わり持とうとせず

居住スペースの入り口に入所者が何人も集まっていたが、施錠されていて出られない。職員はそこから離れた場所にいて、関わりを持とうとしない。そうした光景も目の当たりにした。

職員から入所者についての説明があったが「（他害に及ぶことがあるので）近づかない方がいい」といった注意に終始し、人となりは全く伝わってこなかった。「『問題行動』や『できないこと』だけに目を向けて、さまざまな思いや可能性を持った存在として本人に関わっているようには思えなかった。本人の可能性の幅を広げることを諦めてしまっているように見えた」

園の実態を知るにつれて、支援者と当事者の関係が支援する、されるという一方的なものに映った。「互いに励ましたり励まされたりして影響し合うはずなのに、そうした存在として本人を見ていない」

変化の少ない日常、乏しい活動の機会、対応が困難な人が集中、園外の人との関わりの欠如…。地域と隔絶された施設特有の「異常性」が凝縮された場に、本人だけでなく職員も閉じ込められているように感じた。

「問題行動」より人となりを

（6） 言葉をかけ積極関与

県立中井やまゆり園（中井町）の玄関前に止まったマイクロバスに、自傷他害などの「強度行動障害」がある人らが暮らす生活寮の入所者全7人が職員と乗り込んだ。6月26日、町内の農地で作業するためだ。この寮では個別支援を行ってきた経緯があり、全員が園外に一緒に出て作業をするのは異例だった。

「7人全員が参加し、作業できるか…」。直前まで職員は気をもんでいた。特に気にかけていたのは、繊細で対人緊張やこだわりが強く、時に他害に及ぶ20代男性だった。バスに一番で乗り込んだのはその男性だった。自室で過ごすことが多く、園内での日中活動も限定的なため、園外での活動は大きな挑戦だった。

入所理由の説明なく

この日は入所者との交流を求めて都内から訪れた団体関係者も参加しており、現地では輪になって自己紹介した。この男性が名前を述べて「よろしくお願いします」とあいさつすると、拍手が沸いた。

男性は、職員と一緒に熊手で草を集める作業を担った。しばらくすると、異変が起きた。男性が職員に向かって手を振り上げ、眼鏡が吹き飛んだ。男性は作業の輪から外れ、周囲の人たちがしばしなだめた。

この職員はどこかうれしそうだった。男性の頑張りに触れたからだ。「もっと早く手が出て中座せざるを得ないかもしれないと思っていたが、慣れない作業に一生懸命取り組んでいた」。

男性が児童施設から別の施設を経て園に移ってきたのは3年ほど前。園は児童施設での支援方法に沿って対応してきた。

関わりは必要最小限にし、本人から訴えがあれば傾聴しすべて受容するー。前にいた施設と変わらぬ支援を続けることが、人への不信感が強い本人の安心につながると考えたという。「ごめんなさい」「ありがとう」と本人に伝えるのはなぜかNGだった。

関わることに慎重だったのは入所時の対応にも現れていた。園長との顔会わせはなく、部屋に直行させたという。入所理由を本人に説明することはなかった。

園がそのことの重大性を認識する契機になったのは、入所から2年半ほどたった昨年9月。男性が園を飛び出し所在不明になった。数時間後に発見された際には「家に帰りたかった」と漏らしたという。

「なぜ、園で暮らしているのか。どのような目標を持ち、日々過ごしていくのか。そうしたことを本人に伝えていなかった」。男性の困惑に触れた前園長は猛省し、遅まきながら同11月に本人と面談し、こう伝えた。「将来のことを一緒に考えよう」。

職員たちは今、言葉がけを通じて積極的に関わることを続けている。限定的な関わりでは、生活の幅は広がらないと考えるからだ。

職員が食事を巡って段取りを誤ったある日、激高した本人に「ごめんなさい」と告げた。以前なら禁句だったが、本人は納得したかのように部屋に戻ったという。職員も本人も試行錯誤しながら、やりとりを重ねている。

（職員と一緒に農地で作業に励む男性（左）＝6月26日、中井町）

「失敗なんてない」

農地訪問計画は4日前、今年6月に着任した吉田信雄園長（53）らとの面談で本人に伝えられた。園の支援改革プロジェクトチームの大川貴志さん（45）から「園の外に出たらさまざまなことが起きるけど、失敗なんてない。全部いい経験に変わるから大丈夫。勇気を出して働こう」と語りかけられ、本人も「うーん」と答えた。

同席した職員は「一緒に緊張しながら当日を迎えよう」とエールを送った。面談終了後、本人に「面談、頑張ったね。すごいよ」と声をかけた。慎重な対応に努めていた以前なら、職員がこうして自らの思いを本人に伝えることは自重していたという。

迎えた当日。本人が参加できたことに、この職員はわが事のように声を弾ませて喜んだ。「他の利用者や職員らと一緒にバスに乗り、現地で作業をしたのは大きな経験。中座は失敗でも何でもない」。

農地での作業は約2週間後の7月11日にも行われた。「よく働くね」。周囲の励ましに男性は時折笑顔を見せながら作業をやり遂げた。終了後、木陰で好きな炭酸飲料をぐいっと飲み込んだ。

（7） 自立という名の孤立

（購入したアメリカンドッグにケチャップとマスタードを丁寧にかける男性＝2月下旬、横浜市旭区）

家族連れらでにぎわう横浜市旭区の「よこはま動物園ズーラシア」に、県立中井やまゆり園（中井町）に20年超にわたって入所する40代男性の姿があった。冬の寒さが和らいだ2月下旬の祝日のことだ。

男性は当時、相鉄線沿線の横浜市保土ケ谷区で3回目の地域生活体験のさなかだった。社会福祉法人「夢21福祉会」が運営する生活介護事業所「夢21上星川」で日中は作業をし、夕方以降は同会のグループホーム（GH）で過ごす日々を送っていた。

この日は同会職員と一緒に、電車とバスを乗り継いでズーラシアに出かけた。園内を2時間近く歩き、キッチンカーで購入したアメリカンドッグを食べた。満面の笑みを時折浮かべるなど楽しんでいる様子だった。

GHへの帰り際に遅い昼食を取るために鶴ケ峰駅近くの中華料理店に向かった。入り口で「これ（食べたい）」とショーケース内のラーメンを指で差し、店内へ。熱々のラーメンが届くと、あっという間に平らげた。

休日のささやかな日常だが、外出する機会が少ない施設で暮らす男性にとって記憶に残る1日となった。

長い施設生活の末に

男性が中井園に入所したのは2002年、20代前半だった。父親によると、激しい行動を起こすことがあるため民間施設での受け入れは難しく、選択肢は同園以外にはなかったという。自傷他害などの「強度行動障害」に対応する生活寮で暮らしたところ次第に落ち着き、約1年後には別の生活寮に移った。

起床後に踏み台昇降運動、テレビ視聴を挟んで朝食を取り、そして軽作業を行う作業棟へ。午後の作業後は好きなパズルに興じる…。1日のスケジュールは「日課」として細かく決まっていた。男性の場合、職員の関わりがなくても、自分でタイマーを設定し朝から晩まで日課通りに行動することができたという。

職員がこうした変化の少ない暮らしに疑問を持つようになったのは、昨年8月に園内で新型コロナウイルスのクラスター（感染者集団）が発生したことが大きかった。生活寮内で過ごす窮屈な生活を3週間余儀なくされ、ストレスからか不安定な状態になった入所者は少なくなかった。だが、男性は決められた日課を淡々とこなし、平然としていた。

長期に及ぶ施設生活にあまりにも適応してしまったが故に、何が起きても動じない。職員は反省を迫られた。「施設の中で何でも1人でできることが『自立』と考えてしまい、施設でしか暮らせないようにしてきてしまった。本人を1人にし、孤立させていた」

職員の「潜在意識」

タイマー生活は同年9月にやめた。それぞれの活動が終わったら次に何をするかは、職員に聞く形にした。関わりを生むためだ。

縁あって夢21福祉会とつながり、同9月の2泊3日を皮切りに回を重ねるごとに宿

泊数を増やしてきた。ことし5月の5回目は約2週間に及んだ。

地域生活体験で変わったのは、本人ではなくむしろ園職員だった。これまでは壁を蹴るなどのちょっとした「問題行動」ばかりに着目したり、じっと座っていられないといった「できないこと」ばかりを心配していた。同会職員が人となりを見ながら関わっている様子を通じて、「問題行動」だと思っていたことが大きな問題ではないことを知り、本人にさまざまな可能性があることに気付いていった。

「地域で生活を送る上で特段支障はないこの人が、20年も施設で暮らす必要はあったのだろうか…」。同会職員からは驚きを持って受け止められたが、園ではこの男性の地域移行体験に取り組もうという機運はなかなか生まれなかったという。職員はじくじたる思いでいる。「園が『ついのすみか』になるだろうという潜在意識が私たち職員には強かった。本人がどのような暮らしを望み、どんな人生を歩んでいきたいかといったことに考えが及んでいなかった」

（8） 地域生活へ手を携え

障害当事者たちが手分けして作業をする室内は、コーヒーの匂いが漂っていた。自家焙煎（ばいせん）のコーヒーの粉を計量し、1杯用の袋（ドリップバッグ）に10グラムずつ入れる作業だ。

県立中井やまゆり園（中井町）で20年超にわたって暮らす40代男性も作業の輪に加わり、袋詰めを体験した。社会福祉法人「夢21福祉会」が横浜市保土ケ谷区で運営する生活介護事業所「夢21上星川」で地域生活体験中の2月下旬のことだ。

夢21上星川は6月上旬にコーヒー豆販売店を開店する計画を温めていた。男性の

5回目の体験となった5月下旬は、開店を目前に控えた時期だった。そこで事業所の当事者とともに地域を歩いて周り、PRチラシを投函（とうかん）して回った。

（　**5回目の地域生活体験を終えた男性（右）をねぎらう山口さん＝5月下旬、横浜市保土ケ谷区**

）

「普通の暮らし」実現へ

日中の活動を終えて同会職員と一緒に同会のグループホーム（GH）に向かう際、男性が決まって立ち寄るのがコンビニ。ポテトチップスとジュースを買うのが楽しみだ。自分で小銭入れから時間をかけてお金を出す間、店員は慣れた様子でじっと待ってくれる。

男性は体験当初、買い物かごやエコバックの持ち方が分からなかった。施設生活が続いて買い物をする機会が限られていたためだが、それもすぐに慣れた。

GHへの道のりも覚えた。坂道が多いが、ぐんぐん歩を進める。自室に着いたらまずは買ったばかりのポテトチップスを食べ、ジュースを飲む。その後は好きなパズルをしながら、入浴までの時間を過ごした。

「最初は慣れない環境からか落ち着きがない感じだったが、なじんできた。もう『お客さん』ではない」「ちゃめっ気があって憎めない人。そうした本人らしさが分かってきた」。5回目の体験後、同会職員は本人と共に歩む生活への期待感を膨らませていた。

園ではここ5年でGHに移行し定着したのは1人だけで取り組みに慣れていない。体験を重ねる男性の様子から園職員も学んでいる。「地域生活移行とはGHに単に移ることなのではなく、困ったときに頼れる人や、親身になって関わってくれる人を地域で増やすことだと体感している」

同会GH管理者の山口博之さん（45）は男性と関わるにつれて、地域の福祉事業者が長期入所者の地域移行に十分に取り組めてこなかったことを改めて痛感している。「園での暮らしぶりを知り、本人に出会った者の責任として、さまざまな経験ができる地域での『普通の暮らし』の実現に向けて歩みを進めたい」

支援者こそ問われている

「中井と夢21、どっちがいい」。双方の職員から聞かれると、本人は「夢21」と答えることもあるが、「中井」と答えることが少なくない。双方とも「中井で20年も暮らしているから、そう答えるのも無理はない」と受け止めている。

6月中旬、行政も交えた担当者会議があった。園職員が「施設で20年も暮らす本人がどちらで住むかを決めるのは難しい。地域生活に向けて本人の背中を押したい」と言えば、山口さんは「地域生活への障壁はない。本人と一緒に新たな暮らしに飛び込んでいきたい」と応じ、夢21上星川施設長の岩山みどりさん（64）は「本人はまだ40代。これまでとは違う人生を支えていきたい」と力を込めた。

会議に参加した父親は「体験の成果が思ったより出ている」と受け止めつつ、「移行後に問題が生じたら園に戻れたらいいが…」との要望を口にし、園職員はバックアップしていく考えを示した。会議では本人も体験継続を望んだことから、次回の期間を約1カ月に伸ばすことを確認した。

7月上旬、男性は6回目の体験を始めた。同中旬に再び開かれた担当者会議で、山口さんが意を決したように問うた。「住まいの場を決めるに当たって本人の意向が大事であることは大前提として、園で20年も暮らさざるを得なかった責任は、私たち福祉事業者、園、相談支援事業者、行政にある」。園職員が「本人にだけ中井か地域のどちらがいいか選択を迫るのは無責任」と述べたことへの共感からの発言だった。

責任を長年果たしてこなかった支援者こそ問われている－。山口さんと園職員はそんな思いを胸に自らの責任を果たすべく、男性が「普通の暮らし」を送る日に向けて歩みを止めないつもりでいる

（9） 共に歩む約束の握手

県立中井やまゆり園（中井町）の講堂に、入所者が続々と集まってきた。6月1日、異動で赴任した職員の着任式。吉田信雄新園長（53）のあいさつは、一連の虐待や不適切支援についての謝罪から始まった。

「反省し心を入れ替えて、もっといい園をつくっていきたい」と頭を下げた後、園長としての最初の約束を宣言した。「7月に利用者89人全員が外に出て、楽しく過ごす日をつくります」

園では施設内で完結する暮らしから、地域を意識した生活への転換が課題となっている。

秦野駅近くに設置した交流拠点「らっかせい」や農地で活動したり、事業所で働いたりする入所者が出てきている。だが、地域の活動場所はまだ限られており、日中に園を出るのは一部にとどまる。こうした現状を変えていこうと、まずは入所者全員が園を出る日を設けることにした。

実施日は7月31日と決まった。バーベキュー、水族館巡り、ショッピング、ドライブ…。六つの生活寮ごとにそれぞれの訪問先に向かう。

（入所者の生活の幅を広げることを目指し、関係者と意見交換する吉田園長＝6月下旬、中井やまゆり園 ）

楽しいこと一緒に

県立障害者施設指導担当課長から転じた吉田園長は、福祉職ではなく事務職だ。園の改革の進捗（しんちょく）状況を確認するため、担当課長在職中の2022年3月から園に常駐し現場の変化を見詰めてきた。

就任後、入所者との面談を重ねている。本人のこれからの人生を支援し応援したいという気持ちを込めて、一人一人の思いを探っている。6月下旬の面談には、園の支援改革プロジェクトチームの大川貴志さん（45）らも同席した。

20年近く入所している30代男性が、職員と一緒に園長室にやって来た。

「おはようございます」。本人のあいさつから面談は始まった。吉田園長から「これから楽しいことを一緒にやっていきたいよね」と語りかけられると、「（楽しいことを）やる」と答えた。

園長の右隣にいた大川さんも語りかける。「（普通学級で過ごしていた）小学校は友達に囲まれて楽しかったでしょう。（特別支援学級に移った）中学校は友達と離れて寂しかったでしょう」

そう聞かれた男性は、身を乗り出して耳を傾けた。

大川さんが続ける。「（日中活動などで）頑張れる環境を十分に用意してこなかったことを謝らなくてはならない。楽しかった小学校の時のことを思い出しながら一緒に前に進もう。（楽しかったことを）奪うようなことはもうしない。園長が約束するから」

園長は「これからお互い頑張るために握手をしよう」と右手を差し出したが、男性の手はなかなか動かない。大川さんが苦笑しながら「（本当に応援してくれるか）信用できないかもしれないけど、握手してみようよ」と水を向けると、男性は右手を差し出して園長と握手した。「よし、一緒に頑張ろう」。男性の表情が少し和らぎ、園長から笑みがこぼれた。

何が必要か

幼少期から「問題行動」や「できないこと」ばかりに目を向けられて必要な支援を受けられずに家族ともども孤立感を深め、学齢期には普通学級からの分離・排除で疎外感が一層高まり、支援体制が整わない地域からも排除された末に園にたどり着いた入所者は少なくない。「問題行動」や「できないこと」に着目していた園の姿勢は、障

害を理由に分離・排除する学校教育や地域社会を色濃く反映している。

「ついのすみか」としての側面が強かった園に入所後、地域とのつながりはほぼ絶たれ、園の閉鎖性は強まった。地域生活移行体験の機会を長年にわたって得られなかった長期入所者がいれば、外部の指摘を受けるまで長時間居室施錠の改善が進まなかった人がいる。

一連の虐待や不適切な支援での園や県の責任は極めて重い。園の改革は途上だが、問われているのは園だけではない。施設で暮らす当事者の人生に思いを寄せず、園内で完結する暮らしを放置し、本人とつながることを怠ってきた地域もまた試されている。

中井やまゆり園の入所者89人それぞれと共に歩む人たちの輪が地域に広がるか。それはひとえに、障害者を分離・排除してきた地域が変わらなければ始まらない。